

令和 4 年 5 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H05742・19K20938

研究課題名(和文)Eタンデム学習における英語力の発達：会話の特性と個人差に焦点を当てて

研究課題名(英文)Development of English Proficiency via ETandem: Focusing on Conversational Features and Individual Differences

研究代表者

秋山 友香(Akiyama, Yuka)

東京大学・大学院工学系研究科(工学部)・講師

研究者番号：40825072

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：「Eタンデム」とは互恵関係に基づいた2言語・2文化間のオンライン国際交流(Virtual Exchange)の方法である。これまで多くの研究がEタンデムの言語習得への効果を解明しようとしてきたが、それらの多くはある言語項目(例：過去形、代名詞の使用)にフォーカスしたものが多く、実際のコミュニケーション場面で英語を運用できる能力、つまり、「コミュニケーション力」の発達を見てこなかった(Mackey & Goo, 2012)。本研究はEタンデムという未開拓の学習方法による言語習得の効果を「スピーチのわかりやすさ」、インタラクションの特性、個人差に着目して、量的・質的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)Eタンデムの学習成果を日本の英語教育のコンテキストで調べたのは申請者の過去の研究のみである。また、学習効果、インタラクションの特性、個人差の三者を同時に調べた研究は世界初である。(2)本研究は長期的で自然的な会話活動を研究対象としている。コントロールされた環境で行われる実験的インタラクション研究に比べ、実際の教育現場に応用できる結果が期待できる。また、Eタンデム研究の結果はアプリ開発など社会的場面への応用性が高い。(3)第二言語習得理論の知見と社会言語学の談話分析という手法を組み合わせることで、学際的研究を推進する。様々な分野の研究者から広く引用される研究が期待できる。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed a type of Virtual Exchange called eTandem that takes place between two languages and two cultures based on the principle of reciprocity. Research in the past has attempted to reveal the effect of eTandem on language development; however, most of these studies focused on particular linguistic items (e.g., use of past tense, pronouns) to examine language development, failing to reveal the effect of eTandem on the ability to use the target language in the real life (i.e., communicative competence) (Mackey & Goo, 2012). Thus, this study revealed, quantitatively and qualitatively, the relationship between the development of comprehensibility (as measurement of communicative competence), quality of interactions, and individual differences.

研究分野：第二言語習得、外国語教育、国際コミュニケーション、コンピュータ支援言語学習、談話分析

キーワード：タスクエンゲージメント インタラクション Comprehensibility ビデオ会話 Eタンデム 国際理解
会話スタイル 個人差

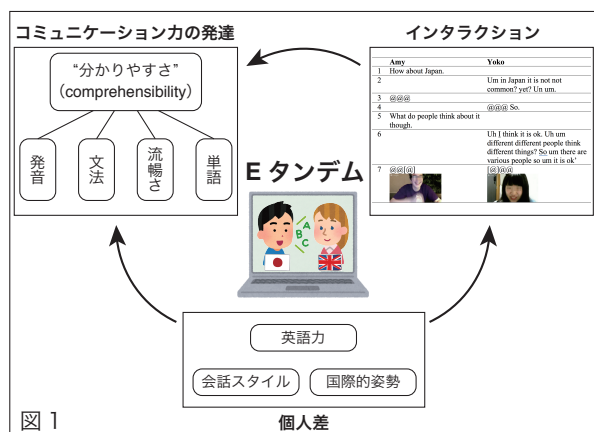
科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

国際化とデジタル化に伴い、英語学習者と日本語学習者がオンライン上で互いの言語を教え合いながら学ぶような外国語学習法が一般的になりつつある。これは「**E タンデム**」と呼ばれており、2言語・2文化の交流、互恵関係に基づいている点が特徴の Virtual Exchange の方法である。これまで多くの研究が E タンデムの言語習得への効果を解明しようとしてきた。しかし、それらの多くはある言語項目(例. 過去形, 代名詞の使用)にフォーカスしたものが多く、実際のコミュニケーション場面で英語を運用できる能力、つまり、「**コミュニケーション力**」の発達を見た研究がなかった(Mackey & Goo, 2012)。そこで、申請者は2014年に日米の E タンデムプロジェクトを行い、**12週間のビデオ会話が英語学習者のコミュニケーション力の発達に影響があるのか調べた**(Saito & Akiyama, 2017)。コミュニケーション力の発達に不可欠な発音、文法、流暢さ、単語を分析し、「分かりやすさ」という包括的な指標で学習効果を測定した。グループ全体の音声データを分析した結果、**E タンデムがコミュニケーション力の発達に効果があることがわかった**。しかし、個人に焦点を当てると、E タンデム学習の経験を通して外国語学習へのモチベーションを上げた学生もいれば、教室外で行われた実践的コミュニケーションの経験により自信をなくしてしまった学生もいた。つまり、グループ全体の平均値を見ただけでは分からない個人差の影響が暗示された。そこで、Akiyama (2017)では「**談話分析**」というミクロ的分析手法により、**成功したペアと不成功に終わったペアのインタラクションの特性を探った**。その結果、成功したペアは協調的な会話によって互恵関係を築いているのに対し、**不成功に終わったペアでは、「会話スタイル」(Tannen, 2005)の差によって、一方の参加者が話し続けるという不平等な会話が行われていた**。この研究により、「会話スタイル」という個人差の一種がインタラクションに影響を与えることがわかったが、それ以外の「**個人差**」が「**インタラクション**」に与える影響、そして、それが「**コミュニケーション力の発達**」にどのように影響するのかが未だに解明されていない。

2. 研究の目的

本研究は、**E タンデムという未開拓の学習方法による言語習得の効果を、インタラクションの特性と個人差に着目して明らかにする**(図1参照)。



このテーマの独自性と創造性は以下の3点である。

- ① E タンデムの学習成果を日本の英語教育のコンテキストで調べたのは申請者の過去の研究のみである。また、**学習効果、インタラクションの特性、個人差の三者を同時に調べた研究は世界初**であり、その研究成果は **E タンデムの学習効果のより深い理解に繋がる**。
- ② 本研究は長期的で自然的な会話活動を研究対象としている。コントロールされた環境で行われる実験的インタラクション研究に比べ、**実際の教育現場に応用できる結果が期待できる**。また、E タンデム研究の結果は**アプリ開発など社会的場面への応用性が高い**。
- ③ 第二言語習得理論の知見と社会言語学の談話分析という手法を組み合わせることで、**学際的研究を推進**する。**様々な分野の研究者から広く引用される研究**が期待できる。

3. 研究の方法

本研究では、以下2つのテーマを設定し、研究課題を立てた。

研究1. 英語コミュニケーション力の発達と task engagement

英語コミュニケーションの発達と task engagement の枠組みで分析したインタラクションの質にはどのような関係があるのか？また、個人差はこれらの関係にどのような影響を与えるのか？

研究 2. 英語コミュニケーション力の発達とフォーカス・オン・フォーム

言語教育の経験のない学習者同士が互恵関係のもと互いの言語を教え合うという E タンデムにおいて、フォーカス・オン・フォーム*はどの程度起こるのか？また、どのようなフォーカス・オン・フォームが行われると、どの側面の言語能力(例. 発音, 文法, 流暢さ, 単語)が発達するのか？そして、個人差はこれらの関係にどのような影響を与えるのか？

*意思疎通ができなかった時に生じる意味交渉(negotiation for meaning)やエラー修正はフォーカス・オン・フォーム (Focus on Form) と呼ばれ、第二言語習得を促すとされている(Long, 1983, 1996). 過去に行われた研究の大半は教師と学生の間、または、ネイティブとノンネイティブの間で起こるフォーカス・オン・フォームを調べてきた。

データ

本研究では、2017年9～12月に授業の一環として行われた E タンデムプロジェクトのデータを分析する。イギリスの大学で日本語を学ぶ 12 人の英語母語話者と日本の大学で英語を学ぶ 12 人の日本語母語話者が参加した。学生はビデオ会話ツールを使い、毎週 1 時間 10 週間に渡り英語と日本語で互いの言語と文化を学びあった。

時期	2017年9月	2017年10月	2017年10月～12月	2017年12月
活動内容	E タンデムの説明	事前テスト	ビデオ会話(10週間)	事後テスト
データ	1. バックグラウンドアンケート 2. 英語力測定テスト	1. 国際的姿勢のテスト 2. 絵を描写する口頭テスト 3. インタビュー	1. ビデオ会話の記録 2. リフレクションジャーナルのデータ	事前テスト #1, 2, 3 と同じ

データ分析

研究 1

1. コミュニケーション力の発達を測定するために、日本人英語学習者(N=12)のプロジェクト前と後のスピーチの“分かりやすさ”をバイリンガルレーター(N=2)に評価してもらった。
2. 会話データ(各ペア約 9 時間)を文字起こしし、task engagement の観点から量的に分析した。
3. 英語力、国際的姿勢、モチベーションなどの個人差に焦点を当てながら、英語力の発達と task engagement の関係を明らかにした。

研究 2

1. “わかりやすさ”を構成する発音、文法、流暢さ、単語の 4 つの基準で、日本人英語学習者(N=12)のプロジェクト前と後のスピーチを評価した。
2. 文字起こしされた会話データからフォーカス・オン・フォームエピソードを抽出し、それらの頻度、質を分析した。
3. テクノロジーアフォードンスの方法、会話スタイルなど質的分析により明らかになる個人差にフォーカスして英語力の発達とインタラクションの質の関係性を明らかにした。

4. 研究成果

2019年～2021年まで産休・育休で研究を中断していたことにより、大幅な遅れが出てしまったため、2022年5月現在、データ分析は終了しているが、メインテーマの成果発表は行っていない。研究 1 の研究成果は 2023 年に米国オレゴン州ポートランドで行われる American Association of Applied Linguistics(AAAL)のコロキウムで発表することになっている(Invited Colloquium entitled “Broadening the base and charting new courses in second language speech comprehensibility research”の一部)。研究 1 の成果は第二言語習得の分野でトップレベルの国際誌(例. *TESOL Quarterly*, *System*)に投稿する予定である。研究 2 は国際学会で成果発表をした後、*Language Learning & Technology* や *CALICO Journal* など、テクノロジーにフォーカスした国際誌に投稿する予定である。

本研究のサブテーマである英語能力の発達、インタラクションの質、個人差に関する研究成果は以下の国際誌、書籍、学会で出版/発表された。

国際誌での出版

Saito, K., Suzuki, S., Oyama, T., & **Akiyama, Y.** (2021). How does longitudinal interaction promote second language speech learning? Roles of learner experience and proficiency levels. *Second Language Research*, 37(4), 547–571.
<https://doi.org/10.1177/0267658319884981>

書籍での出版

Akiyama, Y. (2019). Impact of lexical categories on Skype-mediated multimodal focus on form and vocabulary learning: A task-based study. In E. Zimmerman & A. McMeekin (Eds.), *Technology-supported learning in and out of the Japanese language classroom: Advances in pedagogy, teaching and research* (pp. 91–110). Tonawanda, NY:

Multilingual Matters.

国際学会での口頭発表

Akiyama, Y., & Ortega, L. (May, 2019). “*I live with my girlfriend’: Coming out, virtual friendships, and language learning.*” Lavender Languages and Linguistics Conference 26, Gothenburg, Sweden. (Presented at the Panel on “Multilingualism”)

Akiyama, Y., & Saito, K. (September, 2018). “Discursive features of reciprocity and the development of comprehensibility: Longitudinal case studies of eTandem dyads.” 51st Annual Meeting of the British Association of Applied Linguistics.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Saito, K., Suzuki, S., Oyama, T., & Akiyama, Y.	4. 巻 37(4)
2. 論文標題 How does longitudinal interaction promote second language speech learning? Roles of learner experience and proficiency levels	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Second Language Research	6. 最初と最後の頁 547-571
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0267658319884981	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yuka Akiyama, Kazuya Saito
2. 発表標題 Discursive Features of Reciprocity and the Development of Comprehensibility: Longitudinal Case Studies of ETandem Dyads
3. 学会等名 British Association of Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 秋山友香
2. 発表標題 Virtual Exchangeの可能性と課題：第二言語習得の視点から
3. 学会等名 外国語教育メディア学会関東支部第141回(2018年度秋季)研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuka Akiyama., & Lourdes Ortega
2. 発表標題 "I live with my girlfriend": Coming out, virtual friendships, and language learning.
3. 学会等名 Lavender Languages and Linguistics Conference 26 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Yuka Akiyama	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Multilingual Matters	5. 総ページ数 19
3. 書名 Impact of lexical categories on Skype-mediated multimodal focus on form and vocabulary learning: A task-based study	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------